

差別のない社会に（パピーウォーカーの経験から学んだこと）

東京都・小平市立小平第六中学校 3年
林 里咲（はやし りさ）

私は小学六年生の時から、盲導犬候補の子犬を育てるボランティアをしています。「犬を飼ってみたい。」と言う私に、両親が「せっかく犬を飼うのなら社会に役立つことをしよう。」と提案したからです。生後二ヵ月の子犬を預かり、一歳の誕生日を迎えるまで世話をするのがボランティアの役目です。初めて訓練士さんから子犬を手渡された時は不安でドキドキしましたが、子犬はすぐに私の腕の中で眠ってしまいました。初めて会った私のことを信頼して、安心しきった寝顔で眠っている姿は本当に可愛かったです。ラブラドルの子犬はとてもやんちゃで、私の家にやって来たその日からいたずらばかりしていましたが、しかられてもクヨクヨせず、どんな相手にもフレンドリーに近づいていく姿から、私は明るく前向きに生きることを教わりました。子犬たちと過ごした日々は私にとって一番の宝物です。そしてあっという間に一歳の誕生日がやって来ました。誕生日が悲しいという経験は初めてでした。訓練所への入所日の前日には長い長い散歩をして最後のお別れをしました。「今までありがとう。」そう言った私のことを不思議そうに見ていた子犬の顔が今も目に焼きついています。別れは本当につらいけれど涙を見せたら子犬が心配するので頑張って笑顔で見送りました。

私の家で育てた一頭目の子犬は現在盲導犬になって頑張っています。そして今年四月に巣立っていった二頭目の子犬は神奈川にある訓練センターで訓練中です。

このボランティアを通して私は多くのことを学びました。まず盲導犬の役割ですが、これは単に目の不自由な方が便利に一人でどこへでも行けるようにするためだけではありません。視覚障がいのある方にとって、人の手をわずらわせるのはとてもつらいことなのだそうです。たとえ家族に対してでも「迷惑をかけるのではないか。」と我慢することが多く、「私なんかいない方がいいんじゃないか。」と考えてしまうこともあったといいます。その失われそうになった尊厳を取り戻す手助けをするのが盲導犬の役目なのです。犬は訓練を共にするパートナーのことを大好きになるので、「自分は他者からこんなに

も大好きになってもらえる存在なんだ。」と気づいて自信を取り戻し、新しい一歩を踏み出せるようになるのだそうです。

また、私がボランティア登録している日本盲導犬協会では、二〇〇八年に新しい試みが始まりました。受刑者が盲導犬候補の子犬を育てる、動物を介在した日本初の教育プログラムです。罪を犯した人も心から反省してきちんと罪を償えば、社会は差別することなく受け入れるべきです。しかし実際はとても偏見が多く、元受刑者たちは「どうせ自分はだめな人間なんだ。」と思い再び罪を犯してしまう悪循環が起こっているそうです。その悪循環を断ち切り、受刑者たちがスムーズに社会復帰を果たせるよう支援するのが「あさひ盲導犬パピープロジェクト」です。受刑者たちは約十ヵ月の間、子犬たちを世話しながら一緒に過ごし、「役に立つ喜び、達成する喜び、信頼される喜び」を感じることで自分の価値を再確認するのだそうです。今年一月に第一期のプロジェクトを修了した受刑者の感想に次のようなものがありました。

「今後自分もパピーに笑われないようにきちんとしなければならぬ。パピーは慈しむこと、寛容の心を教えてくれました。」

犬は決して差別をしません。健康な人にも障がいのある人にも、お金持ちにも貧しい人にも、権力のある人にも犯罪を犯した人にも全く同じように接してくれます。そんな犬たちと一緒に過ごすことで、自信をなくした人たちも自分のことをかけがえのない大切な存在であると思えるようになるのです。

私たち人間も、差別のない社会をつくる努力をしなければならないと思います。一人一人が相手を大切に思う心を忘れなければ、この社会はもっと住み良い場所になるはずです。私はこのボランティアを通して学んだことを生かして、これからも一層努力していきたいと思います。